



京の手仕事



名人寄席

よせ

吉田 敦 著

Yoshida Atsushi



文理閣



「愛宕山」と京和傘

京都で唯一の京和傘製造元・日吉屋の5代目西堀耕太郎さん。3代目当主が考案した最大5尺の本式野点傘は宮内庁・茶道家元御用達で、ここだけで製作されている。野点傘の紅白・緑白の美しい二色段張りは匠の技から生まれる。

京和傘の最高峰

お茶席に咲く一輪の花「野点傘」。傘の先が湾曲した中国伝来の「妻折」に対し、京の野点傘の特徴は、広げた傘の先端が真っ直ぐに伸びた独特の形状の「直の端」。侘び寂びの世界に調和した簡素な美しさと落語で一八が「清水の舞台飛び」をしても壊れない堅牢さを持ち合わせた京和傘の最高級品。「3代目当主が考案した最大5尺（直径約21.8cm）の本式野点傘は宮内庁・茶道家元御用達、今も当店のみが製作しています」と日吉屋の西堀耕太郎さん。

京都で唯一の京和傘製造元の5代目である。

野点傘の材は九州産の孟宗

竹。1本の竹から数十本均等に割いて傘骨とする。次に傘の柄に1対の木製の部品轆轤を差し込む「骨組み」から、和紙を貼る親骨と開閉部の子骨を糸で繋ぐ「下事」を経て、和傘の骨格が姿を現す。水とタビオカを決めた割合で配合した液体を煮詰めた糊を使い、あらかじめ型紙に沿って裁断した手漉き和紙を貼るのが「胴貼り」。季節に合わせて糊の粘度や和紙を湿らせる水の量を調節しているという。

貼る作業の中で細心の注意を払うのが「段張り」。色違い

の和紙を紙の継ぎ目が見えぬよう張り上げる。やり直しの効かない一発勝負。野点傘の紅白・緑白の美しい二色段張りはこの匠の技から生まれる。続いて傘を閉じたとき、渦巻状に美しく収まるよう、手と道具で折り目を入れる「姿付け」、刷毛で防水用の亜麻仁油をひと塗りした後は、天日干し。籐巻き、真鍮の金具「石突」を柄の先に付けるなどの化粧を施して、野点傘は完成する。

京和傘から生まれた照明具

傘が庶民の雨具として普及したのは江戸の中頃。日用の意味を持つ「番」が付いた番傘や細身で美しい蛇の目傘が作られ、歌舞伎「助六」や美人画の小道具として凝った意匠の和傘も生まれた。江戸時代の安政年間（1854～60）に近江国生まれの初代が五条河原町の本覚寺門前で傘商の看板を掲げたのが日吉屋の始まり。百々御所（現在の宝鏡寺）の門前に移ったのは2代目からで、以後、京和傘ひと筋で老舗の暖簾を守り続けている。

愛宕山

上方落語屈指の大ネタで、噺の主題は京都人と大阪人の相克。京都室町の旦那が芸妓に舞妓、鞆間の一八と繁八を連れて、春の愛宕山へと野掛けを楽しむ。野掛けとは今日で言うピクニック。大阪のお座敷をしくじり、祇園町で働く鞆間の2人は京生まれを鼻に掛ける旦那から度々大阪を馬鹿にされて、挙げ句、愛宕の急坂に悪戦苦闘する件が笑いを誘う。大詰で土器投げに興じる旦那に、2人は「京はしみたれてる。大阪なら金貨や銀貨を時きまつせ」と反撃

落語ガイド



に出る。すると旦那は土器の替わりに大量の小判を投げ始める。谷底の松の木にキラキラと光る小判。「拾ったら拾った者のもん」と旦那。それを聞いた一八は茶店で借りた野点傘で清水の舞台よろしく飛び降りようとする。…大どんでん返しはサゲは噺を聞いてのお楽しみだ。

株式会社日吉屋

西堀耕太郎さん

〒602-0072

京都市上京区寺之内通堀川東入ル百々町546

TEL 075-441-6644

URL <http://www.wagasa.com/>



本式野点傘5尺(赤白)

和歌山県新宮市生まれの西堀さんが、目吉屋との縁ができたのは約10年前。もともと、日本の伝統文化に強い憧れを持っており、奥さんの実家・目吉屋の和傘づくりを見て「渋いなあ」と感動。手解きをしてくれた4代目や、ベテラン職人への

表。最近発売の「MOTO」は和の要素の少ない無機質な空間にも合うモダンな照明具。京都マルイの店内照明にも採用されている。「伝統的な京和傘を継承しつつ、京和傘から派生した商品が日常的に使われるようになり、やがて現代の番傘になれば嬉しいです」と夢を語る西堀さんの挑戦に今後も注目したい。



工程の一つ「傘貼り」

質問攻めと彼らの手仕事をビデオカメラで撮影。何度も見ること技術の習得に励んだ。「京和傘の伝統が絶えるのは勿体ない。伝統工芸品に憧れを持つ人は多く、潜在的な需要はある筈」と周囲の反対を押し切り、結婚後に公務員から和傘職人へと転身した。今では「伝統は革新の連続である」を信条に、京和傘の竹骨が織り成す幾何学模様や和紙からの優しい灯りを活かした和風照明などの新商品を発



新製品の「MOTO」

「祇園会」と京繡

「祇園祭の掛幕は刺繡の技法の宝庫です」と語るのは繡匠の樹田紅陽さん。明治時代から西陣で3代にわたる京繡の家に生まれた樹田さんは、着物や帯に文様を施す刺繡を中心に京繡の技を活かしたモダンな意匠の作品も手掛ける。

祇園祭で磨いた繡の技

樹田紅陽さんは、繡匠であった父の作品でオランダ船を描いた衝立に施された刺繡の美しさと深みに瞠目して25歳で繡の道へ。師の教えは「髪の毛一本分空けて繡う」。刺繡台にピンと張った布地は台から外せば当然収縮する。きつく繡えば刺繡は浮いてしまう。布に刺繡が馴染むよう柔らかく仕上げるには、髪の毛一本分の空気の通り穴を作って繡うのが極意という。

繡の作業に入る前、樹田さんは軽石とブラシで必ず手を

洗う。指の脂分を落とし、毛羽立ちを防ぐためであるが、精神統一の意味合いもあるのだろう。

修業に励んだ25〜27歳の頃、祇園祭の度に鉦町へ足を運び、山鉦に彩られた掛幕をカメラで撮影すると共にデッサンをして繡法を分析。地道な努力が実り、京都の美術織物会社が保昌山の胴掛復元事業において、祖父の名前を継いで数年後41歳となり、繡師として円熟期を迎えていた樹田さんに白羽の矢を立てた。

足掛け10年に及んだ復元作業は元の胴掛を20倍のルーペ

京繡

樹田紅陽さん

〒602-8248

京都市上京区葎屋町通中立売下ル南儀町326

TEL 075-441-3708